

中日漢字の異形度が中国語を母語とする日本語学習者の 漢字単語の読み上げ課題に及ぼす影響

松島 弘枝・費 曉東

(2011年10月6日受理)

The Effect of Orthographical Differences in Chinese and Japanese *Kanji*
on Chinese Learners of Japanese

Matsushima Hiroe and Fei Xiaodong

Abstract: In the present study, we investigated how Chinese learners of Japanese processed *kanji* that are written differently in Chinese and Japanese. The participants were asked to read Japanese *kanji* in their native language. The result showed that *kanji* with a high degree of orthographical difference in Chinese and Japanese were read more slowly than those with similar written forms. The interference of the pronunciation of Japanese *kanji* was determined through a reading-aloud task. Following the reading-aloud task the participants were asked to rate the degree of difference between the Japanese *kanji* used in the reading-aloud task and their Chinese equivalents with a 7-point rating scale. The mean ratings differed significantly in the *kanji* with a strong orthographical difference between the two languages, but not in the *kanji* with minor differences in written form. These results suggest that in the mental lexicon of Chinese learners of Japanese, the forms of Chinese and Japanese and the pronunciation of Chinese and Japanese have a different connection to the *kanji*.

Key words: Chinese learners of Japanese, Japanese *kanji*, Chinese *kanji*, orthographical difference, reading-aloud task

キーワード：中国人学習者，日本語漢字，中国語漢字，異形度，読み上げ課題

問題と目的

中国語と日本語（以下，中日）は漢字という共通の表記形態を有しており，中日2言語間において，形態類似性が高い漢字が存在する一方，形態類似性が低い漢字も存在する。中国語を母語（native language：以下，L1）とする日本語学習者（以下，中国人学習者）が日本語の漢字を処理するにあたって，このような中日漢字の形態の差異の度合（以下，異形度）はどの程度影響するのだろうか。本研究では，この問題をオンライン課題（on-line task）である読み上げ課題（reading-aloud task）を用いて検討する。心理学実験によって，中国人学習者の心内辞書（mental lexicon）における

中日2言語間の漢字の異形度が与える影響を明らかにすることが本研究の目的である。

近年，中国人学習者を対象に，日本語漢字単語の処理に及ぼすL1知識の影響を検討した先行研究が多くなされている（茅本，1995a，1995b，1996，2002；蔡，2009；蔡・松見，2009；費・松見，2010；蔡・費・松見，2011）。これらの研究は，材料の選定基準の違いによって2つに分けられる。1つ目は「異形度」を基準とした，中日漢字の形態の差異による単語認知の研究である（茅本，1995a，1995b，1996，2002）。2つ目は「類似性（Similarity）」を基準とした，中日漢字の形態の差異による単語認知の研究である（蔡，2009；蔡・松見，2009；費・松見，2010；蔡他，2011）。

前者は漢字の構造上の物理的な違いに着目して漢字の形態を異形度0～4の5群に分類しており、後者は学習者による心理的な印象評定の違いに着目して漢字の形態を類似性高と低の2群に分類している。中国人学習者は、L1において、豊富な漢字知識を持っているので、中日漢字の形態が多少違って、2言語間で形態が全く同じ漢字と同様の過程で処理されることが考えられる。この推測を検討するにあたって、異形度という物理的な尺度だけではなく、類似性という心理的な尺度をも用いる必要がある。つまり、中日漢字の異形度と類似性の問題を明らかにすることによって、中国人学習者による中日漢字の心内辞書の構築を検討する際、中国語の形態表象と日本語の形態表象の連合関係がより明確になると考えられる。本研究では、異形度と類似性の両属性を取り上げ、それぞれを扱った先行研究を概観し、中日漢字の認知に関する形態情報の問題を明らかにする。

茅本(1995b)は、中国語漢字の形態(現代中国語の標準語で使用されている簡体字)と日本語漢字の形態の差異を以下のように「異形度0～4」に分類している。

- (1) 異形度0: 全く同じ
(例: 「横(heng)」と「横」)
- (2) 異形度1: 点や線が1画だけ違う
(例: 「压(ya)」と「压」)
- (3) 異形度2: 構成部分の小さい方が違う
(例: 「经(jing)」と「経」)
- (4) 異形度3: 構成部分の大きい方か両方が違う、または欠落している
(例: 「县(xian)」と「県」)
- (5) 異形度4: 全く異なる字体になっている
(例: 「书(shu)」と「書」)

この分類を用いて、茅本(1996)は、中国語漢字(一字)に対応する形態の差異のある日本語漢字を中国語で読み上げる際の処理過程を検討した。その結果、同形語(異形度0)は異形語(異形度1～4)よりも反応時間が短い現象が見られた。このことから、茅本(1996)は、中日漢字の間に連結(link)ができていることを指摘しており、上級の学習者が異形語を中国語で読み上げる際、まず日本語音が想起され、それが中国語音での反応を遅らせたと考察している。また、茅本(2002)は、上級の中国人学習者における日本語漢字単語(二字)の処理に及ぼす異形度の影響を検討した。実験では、漢字単語を構成する二文字のそれぞれの異形度(茅本1995b)の合計を2で割った値が漢字単語全体の異形度とされ、語彙判断課題と日本語での読み上げ課題が行われた。その結果、語彙判断課題

では、異形度が低い漢字単語の反応時間が異形度が高い漢字単語と比べて有意に短く、読み上げ課題では、異形度が低い漢字単語の反応時間が短い傾向が見られた。中日2言語間において、同形語と異形度が低い漢字語が強く結びついていることが示唆された。

この2つの研究から、中国人学習者は、日本語の漢字を中国語で反応することを求められても、また日本語で反応することを求められても、その処理過程に中日漢字の異形度が影響を及ぼすことがわかった。これらの研究の結果は、1つの漢字を介して中日両方の字形、及び漢字音が心内辞書に収められ、連結していることを示唆している。しかし、この現象が実験により確かめられたのは同形語(異形度0)と異形語(異形度1～4)の比較に限られており、各異形度間においてどのような違いが見られるかは不明のままである。異形度4の漢字は、中国語とは全く異なる字体になっているので、同形語とは異なる処理過程が推測されるが、異形度1, 2, 3の漢字については、同形語と異なる処理過程が存在するのであろうか。

茅本(1995b)の異形度の調査結果をもとに、類似性を指標として、日本語漢字の処理に及ぼす中日2言語間の形態類似性の影響を検討した研究がある(蔡, 2009; 蔡・松見, 2009; 費・松見, 2010; 蔡他, 2011)。これらの研究では、茅本(1995b)による異形度0～3の漢字を形態類似性が高いものとし、異形度4の漢字を形態類似性が低いものとして操作し、実験的検討が行われた。蔡・松見(2009)や蔡他(2011)は、単独呈示された場合の漢字単語の処理過程を、また、蔡(2009)は、日本語文が先行呈示された場合の漢字単語の処理過程をそれぞれ検討した。その結果、形態類似性が高い単語は類似性が低い単語より反応時間が短いことが示された。

また、費・松見(2010)では、聴覚的に単独呈示された場合の漢字単語の処理過程が検討され、視覚呈示する場合と同様に、形態類似性が高い単語は類似性が低い単語よりも反応時間が短いことが示された。これらの結果は、中日漢字の形態類似性の高低が、日本語漢字の処理に影響を及ぼすことを示している。しかし、形態類似性を操作したこれらの研究は、全部二字の漢字単語を材料としたものであり、一字の漢字単語を材料としたものではなかった。二字の漢字単語では、単語を構成する2つの漢字の意味の結末が強いので、二字の漢字単語の結果をそのまま一字の漢字単語の現象として捉えることは難しい。すなわち、一字の漢字単語を対象とした実験を独自に行い、材料選定に関して、個々の漢字の類似性の問題を明らかにする必要がある。

以上の先行研究をまとめると、異形度を指標とした

場合も、類似性を指標とした場合もともに、中日漢字の形態の2言語間の差異は、日本語漢字単語の処理に影響を及ぼす可能性が大きいといえる。しかし、異形度を指標とした場合、その影響が異形度0~4のどの段階でも見られるのかについては検討されていない。この影響を詳しく分析することにより、中日2言語間で漢字の形態と音韻の表象がどのように連結されているかがより明確になるだろう。また、類似性を指標とした場合の研究は、類似性と異形度との関連を検討していない。学習者が異形度0~4をどのように評定するかという類似性と異形度の関連を明らかにすることは、中国人学習者における日本語漢字単語の心内辞書を検討する際、心理的な評定尺度という基準を導入する根拠を提供してくれると考えられる。本研究では、上級の中国人学習者が日本語漢字を処理する際、中日漢字の異形度0~4の間でどのような違いが見られるかを読み上げ課題で検討し、さらに、中日漢字の形態情報にかかわる異形度と類似性の関連を調べる。

以上をまとめると、本実験の目的は次のようになる。上級の中国人学習者が日本語の漢字(一文字)を処理する際、中日漢字の異形度による影響がどの段階で見られるかを検討する。具体的には、L1(中国語)での読み上げ課題を用いて、学習者が日本語漢字をL1で読み上げる際、中日漢字の各異形度の間にどのような違いが見られるかを検討する。また、読み上げ課題が終了した後、実験で使用した漢字について、形態類似性の調査を実施し、異形度に加えて類似性という観点からも分析する。

仮説は以下の通りである。

【仮説1】 茅本(1996)では、中国人学習者が異形語をL1で読み上げる際、まず日本語音が想起され、それが中国語音の処理に影響を及ぼすことが示唆された。よって、異形度が高い漢字は、日本語として認識されやすいので、異形度が低い漢字よりも反応時間が長くなるだろう。

【仮説2】 同様に茅本(1996)の考察によって、異形度の低い漢字(異形度1, 2, 3)が、同形語(異形度0)と同様の処理過程を持っているのであれば、異形度の低い漢字と同形語との間に反応時間に差が生じないだろう。

方 法

【実験参加者】 中国語をL1とする上級の日本語学習者16名であった。すべての実験参加者は、日本国内の大学で留学生生活を送っており、日本語能力試験1級を取得していた。また、参加者の日本滞在経験は半年から

3年であった。

【実験計画】 実験は異形度を要因とした1要因配置を用いた。茅本(1995b)の調査による異形度0・異形度1・異形度2・異形度3・異形度4の5水準であった。実験参加者内変数であった。

【材料】 実験で使用した材料は、茅本(1995b)の調査資料をもとに、異形度0, 異形度1, 異形度2, 異形度3, 異形度4の5つのリストから選定した。各リストから12個ずつ、計60個の漢字材料を作成した。表1に実験で使用した漢字の例を示す。

表1 実験で使用された材料の例

異形度 0	異形度 1	異形度 2	異形度 3	異形度 4
放(放) 冬(冬)	圧(圧) 浅(浅)	経(経) 課(課)	県(県) 実(実)	豊(豊) 楽(楽)

※括弧に中国語漢字を表す。

5種類の漢字について、使用頻度、音韻類似度、画数がすべて統制された。各種類の単語の頻度について、『現代雑誌九十種の用語用字(第二分冊)-漢字表-』を用いて、すべての単語の使用頻度を調べ、その平均頻度を算出して分散分析を行った。その結果、単語の条件間で有意な差は生じなかった($F(4, 55) = 0.63, n.s.$)。また、音韻類似度について、茅本(1995a)の音韻類似度調査の資料に基づいて各種類の音韻類似度の平均値を算出し、分散分析を行った結果、単語の条件間で有意な差は生じなかった($F(4, 55) = 0.97, n.s.$)。各種類の漢字の平均画数について、同様に分散分析を行った結果、単語の条件間で有意な差は生じなかった($F(4, 55) = 1.59, n.s.$)。これらのことから、各種類の漢字の頻度、音韻類似度、画数はほぼ等質であるとみなすことができる。

【装置】 実験プログラムは、SuperLab Pro (Cedrus社製 Version 4.0)を用いて作成された。実験では、パーソナルコンピュータ(SOTEC PC-R502A5)と周辺機器及びボイスキー(Cedrus SV-1)が用いられた。実験参加者の口頭反応を録音するために、ICレコーダー(Voice-Trek V-61)が用いられた。

【手続き】 実験は個別に行われた。コンピュータ画面中央に注視点が1000ms呈示され、2000ms後に日本語の単語が最大3000ms呈示された。単語が呈示されている間に反応があれば、その時点で単語が消えるようになっていた。単語が3000ms呈示されている間に何の反応もなければ無反応とみなされ、2000ms後に次の試行に移った。注視点は全試行の最初だけ呈示さ

れた。実験参加者は、呈示された単語をできるだけ速く正確に中国語で読み上げるように教示された。単語の視覚呈示開始から実験参加者が読み始めるまでの時間が反応時間としてボイスキーとコンピュータにより自動計測された。読みのエラーなどを確認するために、実験参加者の許可を得た上で、口頭反応はすべてICレコーダーを用いて録音された。本試行が始まる前に10個の練習試行が行われた。実験の1試行の流れを図1に示す。

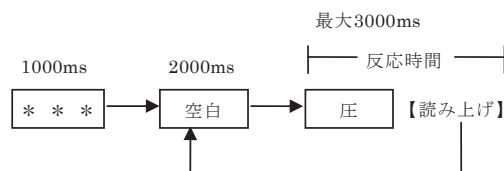


図1 実験における1試行の流れ

本試行終了後に、実験参加者の言語学習歴に関する筆記式アンケートが行われた。さらに、本実験の反応時間と比較するために、また、茅本(1995b)で分類された異形度を心理的な尺度で調べるために、実験参加者の主観的判断による中日漢字の形態類似性評定の調査も行われた。具体的には、本実験で使用された5種類の漢字材料をランダムに並び替えたりストを実験参加者に呈示した。実験参加者には、これらの漢字は中国語に対応する漢字と形態がどれぐらい似ていると感じるかを7段階で評定させた。この調査は、異形度と類似性との関係を明らかにするために行われるものであった。

結果

読み上げ課題についての分析対象は正反応時間のみであった。各実験参加者の無答、誤答と未知単語については、それらの反応時間を分析対象から除外した。また、実験参加者ごとに平均反応時間と標準偏差を求め、平均反応時間 $\pm 2.5SD$ から外れたデータは、すべて分析の対象から除外した(除外率は6.77%であった)。

図2に各条件における平均反応時間および標準偏差を示す。1要因5水準の分散分析を行った結果、異形度の主効果が有意であった($F(4, 60) = 11.16, p < .001$)。Ryan法による多重比較の結果、異形度4は、異形度2($t = 4.53, df = 60, p < .05$)、異形度1($t = 3.75, df = 60, p < .05$)、異形度0($t = 5.48, df = 60, p < .05$)との間で有意な差が見られた。これは、異形度4の漢字が、異形度2、異形度1、異形度0の漢字よりも反応時間

が長いことを示す。また、異形度3は、異形度2($t = 3.61, df = 60, p < .05$)、異形度1($t = 2.83, df = 60, p < .05$)、異形度0($t = 4.56, df = 60, p < .05$)との間で有意な差が見られた。これは、異形度3の漢字が、異形度2、異形度1、異形度0の漢字よりも反応時間が長いことを示す。異形度4と異形度3($t = 0.92, df = 60, n.s.$)、異形度2と異形度1($t = 0.78, df = 60, n.s.$)、異形度2と異形度0($t = 0.95, df = 60, n.s.$)、異形度1と異形度0($t = 1.73, df = 60, n.s.$)の間に有意な差は見られなかった。

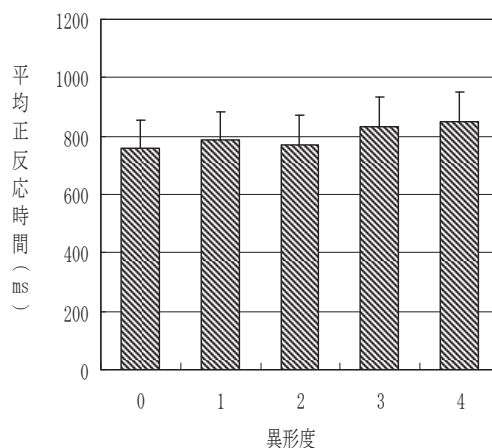


図2 読み上げ課題における各条件の平均反応時間および標準偏差

なお、本実験の反応時間について、各条件における誤答率を算出し、角変換した値について反応時間と同様に1要因5水準の分散分析を行った。各条件の誤答率および標準偏差を表2に示す。分散分析を行った結果、異形度による誤答率の主効果が有意であった。 $(F(4, 60) = 3.72, p < .01)$ 。Ryan法による多重比較の結果、異形度4は、異形度3($t = 2.67, df = 60, p < .05$)、異形度2($t = 2.67, df = 60, p < .05$)、異形度1($t = 3.27, df = 60, p < .05$)、異形度0($t = 3.27, df = 60, p < .05$)との間で有意な差が見られた。これは、異形度4の漢字が、異形度3、異形度2、異形度1、異形度0の漢字よりも誤答率が高いことを示す。異形度3と異形度2($t = 0.00, df = 60, n.s.$)、異形度3と異形度1($t = 0.60, df = 60, n.s.$)、異形度3と異形度0($t = 0.60, df = 60, n.s.$)、異形度2と異形度1($t = 0.60, df = 60, n.s.$)、異形度2と異形度0($t = 0.60, df = 60, n.s.$)、そして異形度1と異形度0($t = 0.00, df = 60, n.s.$)では、いずれの間においても、有意な差は見られなかった。以上の結果より、L1の読み上げにおいて、いずれの条件間

でも、反応時間が短い条件で誤答率が高く、逆に反応時間が長い条件で誤答率が低いという、トレードオフ (trade-off) 現象は生じなかった。したがって、本実験の反応時間には、課題遂行の結果が純粋に反映されていると考えられる。

表2 実験の各条件の誤答率 (%) 及び標準偏差

	異形度 0	異形度 1	異形度 2	異形度 3	異形度 4
誤答率 (SD)	0.00 (0.00)	0.00 (0.00)	1.05 (4.06)	1.05 (4.06)	5.71 (8.61)

反応時間と同様に、実験参加者による形態類似性の評定値についても、1要因5水準の分散分析を行った。その結果、異形度の主効果が有意であった ($F(4, 60) = 45.23, p < .001$)。Ryan 法による多重比較の結果、異形度4は、異形度3 ($t = 3.01, df = 60, p < .05$)、異形度2 ($t = 7.13, df = 60, p < .05$)、異形度1 ($t = 9.41, df = 60, p < .05$)、異形度0 ($t = 11.74, df = 60, p < .05$) との間で有意な差が見られた。これは、異形度4の漢字が、異形度3、異形度2、異形度1、異形度0の漢字よりも異形語としての評定値が高いことを示す。異形度3は、異形度2 ($t = 4.12, df = 60, p < .05$)、異形度1 ($t = 6.40, df = 60, p < .05$)、異形度0 ($t = 8.73, df = 60, p < .05$) との間で有意な差が見られた。これは、異形度3の漢字が、異形度2、異形度1、異形度0の漢字よりも異形語としての評定値が高いことを示す。また、異形度2と異形度0の間で有意な差が見られ ($t = 4.61, df = 60, p < .05$)、異形度2の漢字は異形度0の漢字よりも異形語としての評定値が高いことが示された。それに対し、異形度2と異形度1 ($t = 2.29, df = 60, n.s.$)、異形度1と異形度0 ($t = 2.33, df = 60, n.s.$) の間に有意な差は見られなかった。

考 察

本研究では、上級の中国人学習者の一字の漢字単語の処理に及ぼす異形度の影響を検討し、異形度と類似性の関連性を調べた。L1での読み上げ課題を用いて検討した結果、中日漢字において、異形度3と異形度4の漢字は異形度0、異形度1、異形度2の漢字よりも反応時間が有意に長いことが示された。仮説1が支持された。中国人学習者は、中日2言語間の漢字の異形度が高ければ高いほど、その日本語の漢字を中国語として処理するのに時間がかかることがわかった。中国人学習者の心内辞書において、異形度によって漢字の中国語の形態表象と日本語の形態表象の結合が異なる

ことが推察できよう。以下、本実験の反応時間及び実験参加者による形態類似性の評定値に基づいて考察を行う。

まず、本実験の読み上げ課題の反応時間の結果について考察する。異形度0、異形度1、異形度2の間において、反応時間に有意な差が見られなかったことは、学習者がこれらの日本語漢字を中国語漢字と同様の過程で処理していることを意味する。すなわち、豊富な漢字知識を持っている中国人学習者は、中日漢字について、2言語間において少々形態のずれがあっても、その日本語漢字をそれに対応する中国語漢字として瞬時に認識することができる。異形度1、2と異形度0の間に有意な差が見られず、異形度3と異形度0の間に有意な差が見られたことは、仮説2が部分的に支持されたといえよう。蔡・松見 (2009) では、中日の漢字単語 (二字) において、形態類似性が高い漢字単語の形態表象が中日2言語間で共有して構築されていることが示された。本研究の結果から、形態類似性が高い漢字 (一字) の場合、中日2言語間の形態情報は同じ表象 (形態) に貯蔵されているか、中日それぞれの形態表象に貯蔵されているが、その2つの表象が近い距離にあることが推察できる。異形度0、異形度1、異形度2の漢字は、類似性の観点から考えると、形態類似性が高い1つのタイプにまとめて扱ってよいであろう。

また、異形度4と異形度3との間に有意な差が見られなかったことは、中国人学習者が異形度4と異形度3の漢字をほぼ同様の過程で処理することを意味するといえよう。異形度3と異形度4の漢字は、異形度0、異形度1、異形度2の漢字よりも反応時間が長い現象が見られた。この結果は、学習者が異形度3と異形度4の日本語漢字を中国語漢字として瞬時に処理するのに時間がかかることを示している。蔡・松見 (2009) の心内辞書モデルにあてはめると、異形度3と異形度4の漢字は、中国語の形態表象と日本語の形態表象が2言語間において、それぞれ独立して構築されていることが推察できる。異形度0、1、2の漢字とは異なり、異形度3と異形度4の漢字は形態類似性が低いものとして考えてよいであろう。同形語 (異形度0) と異形語 (異形度1~4) を操作した茅本 (1996) では、上級の学習者が異形語を中国語で読み上げる際、まず日本語音が想起され、それによって中国語音での反応を遅らせたと考察されている。本研究の結果は、茅本 (1996) のこの考察を支持し、さらに、茅本 (1996) の考察をより詳しく説明できると考える。すなわち、学習者が異形度3と異形度4の日本語漢字を中国語で読み上げる際、日本語の形態を中国語の形態に変換す

るのに時間がかかったとも考えられるが、本研究の実験参加者が日本で生活していることを考慮すると、漢字の日本語音が干渉をもたらしたと考えられる。上級の中国人学習者は、異形度1と異形度2の漢字を中国語よりに、異形度3と異形度4の漢字を日本語よりに処理することが推察できよう。

次に、実験参加者の心理的印象評定による形態類似性の調査結果について考察する。実験参加者の評定値を分析した結果、異形度0と異形度1、そして異形度1と異形度2の漢字において異形語としての評定値に有意な差が見られなかった。茅本(1995b)は、漢字の構造によって中日漢字を異形度0～4に分類したが、本研究の実験参加者による形態類似性の評定の結果は、茅本(1995b)の分類の結果とは異なるものであった。すなわち、漢字の構造上の多少の違いがあっても(異形度0と異形度1、異形度1と異形度2)、中国人学習者は日本語漢字をその漢字が対応する中国語漢字と同様に認識できる。また、読み上げ課題の反応時間においても、異形度0と異形度1、そして異形度1と異形度2との間に有意な差が見られなかった。すなわち、このような中日漢字において、主観による類似性評定でも、漢字に対する即時的反応でも、学習者は中国語漢字と日本語漢字を同様の過程で処理できると考えられる。構成が全く同じ或いは点や線が1画のみ違っている中日漢字、そして、構成部分の小さいほうが違っている中日漢字は、中国人学習者の心内辞書において、同じ形態表象に貯蔵されているか、中日それぞれの形態表象に貯蔵されているが、その2つの表象が近い距離にあることが推測できよう。

以上の結果をふまえると、中日漢字の形態に関する問題を検討する際は、異形度だけでなく、類似性も考慮する必要があると考えられる。本研究の実験と調査の結果は、中国人学習者の漢字単語の心内辞書を検討するための基礎資料になるであろう。

本研究では、中日漢字の異形度に着目し、日本に留学している上級の中国人学習者が日本語漢字をL1である中国語で読み上げる際の処理過程を検討した。本研究の発展課題として以下の2点が挙げられる。

1点目は、学習者の習熟度及び学習環境を変えて検討を行うことである。本研究の結果より、日本語の習熟度が高い上級の学習者において、日本語漢字を中国語で読み上げる際、漢字の日本語音の影響が強いと推察できる。しかし、日本語の習熟度が低い学習者の場合は、日本語漢字を中国語で読み上げる際、日本語の影響が弱いことが予測され、習熟度が高い上級学習者とは異なる結果が見られる可能性が高いと考えられる。また、本研究の学習者は、日常的に日本語を使用

しており、日本語音の処理経験が豊富である。本研究の学習者とは異なり、海外にいる日本語学習者は、日常的に日本語を使用する機会が少なく、日本語音の処理経験が少ないと推察できる。このような学習者にとっては、日本語の漢字を中国語で読み上げる際、その漢字の日本語音がどのように影響を及ぼすだろうか。中国人学習者の心内辞書を検討するための基礎研究として、これらの問題を明らかにすることには、重要な意義がある。

2点目は、一字の漢字単語だけでなく二字の漢字単語を材料として検討を行うことである。茅本(2002)は、単語を構成する2つの漢字の異形度の合計を2で割った値を二字の漢字単語の異形度としている。しかし、一字よりも二字の方が意味の結合が強いと考えられるため、学習者の中の二字の漢字単語の異形度は、単純にそれを構成する2つの漢字の異形度の合計で決められるとは考えにくい。中日2言語間の漢字の形態の差異について、中国人学習者はどのように認識しているのだろうか。一字の漢字単語と二字の漢字単語の異形度の問題を検討することによって、中日2言語間での漢字の形態情報に対する認知メカニズムがより明確にできるであろう。

【引用文献】

- 蔡 鳳香(2009) 中国人上級日本語学習者の日本語漢字単語の処理過程一文の先行呈示事態における検討—広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部(文化教育開発関連領域), 58, 205-212.
- 蔡 鳳香・松見法男(2009). 中国語を母語とする上級日本語学習者における日本語漢字単語の処理過程—同根語と非同根語を用いた言語間プライミング法による検討—日本語教育, 141, 13-24.
- 蔡 鳳香・費 暁東・松見法男(2011). 中国語を母語とする日本語学習者における日本語漢字単語の処理過程—語彙判断課題と読み上げ課題を用いた検討—広島大学日本語教育研究, 21, 55-62.
- 費 暁東・松見法男(2010). 中国語を母語とする日本語学習者における日本語漢字単語の聴覚的認知—中日2言語間の形態と音韻の類似性による検討—2010年度日本語教育学会秋季大会予稿集, 313-314.
- 茅本百合子(1995a). 同一漢字における中国語音と日本語の音読みの類似度に関する調査 広島大学日本語教育研究, 5, 67-75.
- 茅本百合子(1995b). 日本語漢字の読みに及ぼす母語の音韻情報の影響—中国語母語話者の場合—平成6年度広島大学大学院教育学研究科修士論文(未

公刊).

茅本百合子 (1996). 日本語漢字と中国語漢字の形態的・音韻的差異が中国語母語話者による日本語漢字の読みに及ぼす影響 広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 (文化教育開発関連領域), 45, 345-352.

茅本百合子 (2002). 語彙判断課題と命名課題における中国語母語話者の日本語漢字アクセス 教育心理学研究, 50, 436-445.

国立国語研究所(1963). 現代雑誌九十種の用語用字(第二分冊)―漢字表― 秀英出版.

(主任指導教員 松見法男)